

Infolettre de l'AJÉQ

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2021年 秋号

第12巻第2号(通算33号)

2021年11月30日発行

2021年度 全国大会 特集

第12回全国大会総括

関 未玲 (立教大学)

2021年10月9日、13回目となる日本ケベック学会の全国大会が開催されました。昨年続き、今年度もオンラインでの開催になりましたが、対面開催を予定していた目白大学メディア学部メディア学科には共催という形で大変お世話になりました。オンラインということで、当日は北海道から九州に至る日本全国からご参加いただいただけでなく、ケベック、韓国から、総勢75名の参加があり、盛況のうちに幕を閉じることができました。

開催を準備していた8月中旬、立花会長の訃報が伝えられました。逝去される直前まで、韓国ケベック学会とやり取りをしていた立花会長のお気持ちを思い、関係者一丸となって故立花先生のためにも、充実した会となるよう準備に邁進したことが、昨日のことも思い出されます。丹羽大会実行委員長と開催校代表の杉原理事が綿密に登壇者とやり取りをしてくださ

り、自由論題では3件の研究発表、2本の講演、そしてシンポジウムという充実したプログラムで開催することができました。開会では、ケベック州政府在日事務所のダヴィッド・ブルロット代表にご挨拶をいただきました。「ありがとう、立花先生」と題するビデオも流していただき、ケベック州政府国際関係・フランス語圏担当大臣でいらっしゃるナディーヌ・ジロー氏より、お悔みと立花先生の日ケ交流のご功績を称えた書面をいただき、代読いただきました。改めてお礼申し上げます。自由論題のセッションでは、韓国ケベック学会からパク・ヒテ会員にもご登壇いただき、ダイレクトシ



開会式(左上から時計回りに、丹羽卓会長代行、ダヴィッド・ブルロット・ケベック州政府在日事務所代表、総合司会の加藤普会員)

●本号の内容●

巻頭言(関未玲) …1

全国大会セッション報告 …3



立花英裕先生を偲んで (右は小倉和子顧問)

ネマを中心とするケベックのドキュメンタリー作品について分析いただきました。自由論題ではこのほかにも、ケベック・ライシテ法やスピリチュアルケアの観点から、AJEQ 会員によるアクチュアルな研究発表があり、質疑応答が白熱しました。また午前の講演では世界的なアニメーション作家である山村浩二氏にご登壇いただき、カナダ国立映画庁との共同制作の過程や取り組みについて、手掛けられたアニメーションもご紹介いただきながらご講演いただきました。ケベックと日本のアニメーションの作風の違い、文化事業支援の違いなど、実際の映像や写真を見ながら拝聴できる、貴重な機会となりました。

お昼休みには、立花会長と二人三脚で AJEQ 運営にあたってこられた小倉和子顧問より、「立花英裕先生を偲んで」と題して、立花先生のご経歴とケベック研究の功績、また AJEQ へ届きました弔電の数々について紹介がありました。この弔電は冊子にまとめていただき、ご遺族にお渡しさせていただきました。AJEQ 理事として設立当初よ

り尽力されてきた立花先生のお写真もスライドショーにまとめ、見せていただきました。

午後には、クロード・ブルアン氏のビデオ講演が流され、昼夜が逆転する時差にもかかわらずご本人も参加されて、質疑応答にお答えいただきました。日本映画に造詣の深い映画評論家でもあり、作家でもいらっしゃるブルアン氏の日本映画史および海外での受容史は大変興味深く、新たな発見がありました。本講演は、AJEQ の助成を得ることができました。

さらにシンポジウム「ケベックの映画とアニメーション：映像文化とその表象をめぐってーケベックと日本」では、これまであまり知られてこなかった日ケの映像文化交流の変遷を辿ることができました。登壇者の一人で、ケベック映画「新しい街 ヴィル・ヌーヴ」を配給されたアニメーション研究家の土居伸彰氏からは、本作品の紹介だけでなく、新しい映像美としてのケベック・アニメーションの魅力についてお話しただけでした。同じくシンポジウムの登壇者であり、本プログラム企画の多くを負ってくださった杉原賢彦理事には、ここに改めてお礼申し上げます。全プログラムを通じてケベックの現在、日ケの映像文化交流の歴史とその功績を再発見する有意義な一日となりました。改めてご登壇者にご参加された皆さまにお礼申し上げます。

(日本ケベック学会事務局幹事長)

<日本ケベック学会第 7 期役員紹介>

去る 10 月 9 日に開催された日本ケベック学会総会において、第 7 期役員が承認されました。

会長 丹羽 卓 (金城学院大学)
副会長 真田 桂子 (阪南大学)
廣松 勲 (法政大学)
コルベイユ, スティーヴ (聖心女子大学)
顧問 小倉 和子 (立教大学)
監事 加藤 普 (理化電子)
曾田 修司 (跡見学園女子大学)
理事 荒木 隆人 (広島大学)
飯笹 佐代子 (青山学院大学)
大石 太郎 (関西学院大学)
片山 幹生 (早稲田大学)
河野 美奈子 (立教大学)
小松 祐子 (お茶の水女子大学)
近藤 野里 (青山学院大学)
杉原 賢彦 (目白大学)
関 未玲 (立教大学)
橘木 芳徳 (暁星学園)
西川 葉澄 (慶應義塾大学)
村石 麻子 (福岡大学)
矢頭 典枝 (神田外語大学)

<各セッション報告>

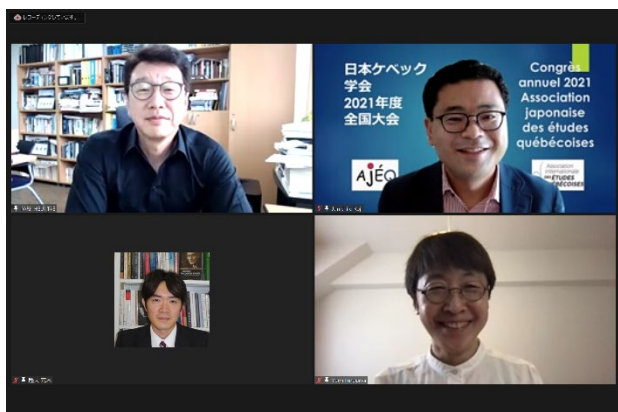
2021 年度全国大会は、ケベック州在日事務所代表ダヴィッド・ブルロット氏ならびに共催校代表の三上義一氏のご挨拶に始まり、自由論題、講演およびシンポジウムで活発な議論が繰り広げられました。以下は、それぞれの司会者からの報告です。

自由論題セッション

司会：古地 順一郎 (北海道教育大学)

今年度の大会は自由論題から始まり、ライシテをめぐるテーマを中心に 3 本の興味深い報告がなされた。1 本目は、荒木隆人会員 (広島大学) による「ケベック・ライシテ法における個人の権利と集団の権利の相克：ケベック州第 21 号法案を巡る政治過程」と題された報告であった。ケベックにおける「ライシテ」をめぐる議論については、チャールズ・テイラーやジェラルド・ブシャールといった国際的に著名な研究者の関与もあり、日本も含めた世界各地で学術的な関心を集めている。本報告では、ケベック未来連合政権が 2019 年 3 月に提出し、6 月に州議会で可決された第 21 号法案の審議過程における主要アクターの言説分析の結果が示された。第 21 号法案は、「妥当なる調整」をめぐるブシャール＝テイラー委員会の報告書で示されたライシテに関わる立法化の最新の試みであり、公務員などの宗教的シンボルの着用に関する規定がなされた。法案に賛成した勢力は、個人の権利に配慮しつつも、ネイションとしての集団的





(左上から時計回りに) パク・ヒテ氏、司会の古地順一郎会員、古澤有峰会員、荒木隆人会員

権利を強調する言説を展開したことが明らかにされた。一方、テイラーおよびブシャールを含む反対派は、少数派の信仰の自由を侵害している点を中心に、個人の権利に力点を置いた言説を展開したことが示された。その上で、第 21 号法案をめぐる政治過程では、1) 個人と集団の権利のバランス、2) カトリック的な象徴を文化的な遺産として整理するライシテのあり方が争点になったことが明らかにされた。

2 本目は、古澤有峰会員(東京大学大学院)による「ケベックにおけるスピリチュアルケアとライシテをめぐる諸問題」と題された報告であった。公共の医療・福祉施設における宗教や聖職者の位置付けをテーマとしたもので、ケベックにおけるライシテに関する理解を深める上でも興味深い報告であった。本報告では、スピリチュアルケアに関する説明に引き続き、北米におけるスピリチュアルケアの歴史が紹介された。また、ケベックにおけるスピリチュアルケアに関する議論は、英語圏から約 20 年遅れて 1980 年代から表面化した、スピリチュア

ルケアのケベックモデル構築に関わる議論が本格化したのは 2000 年代に入ってからということも示された。スピリチュアルケアワーカーの資格化や科学的手法に基づく評価など、特定の宗教や教会に基づかないより中立的な制度構築が目指される一方で、中立という名の下に多数派が自らの価値観による基準を決めていく可能性に対する懸念も指摘された。さらには、スピリチュアルケアをめぐる制度構築に関する宗教的な多数派と少数派の間の権力関係、LGBTQ+ や障害者などに配慮したスピリチュアルケアのあり方といった課題への言及もなされた。本学会でほぼ扱われてこなかったテーマだけに、今後の研究の発展が期待される報告であった。

3 本目は、韓国ケベック学会 (ACEQ) からお招きしたパク・ヒテ先生 (成均館大学) による「*Un documentaire québécois pas comme les autres - À Saint-Henri le cinq septembre (1962)* (ユニークなドキュメンタリー映画『9 月 5 日のモントリオール市サン・アンリ地区にて』)」であった。ユベール・アカン監督による作品を扱った報告は、最初の 2 本の報告とは趣が異なるが、今回の大会ではケベック映画に焦点を当てた企画が多かったこともあり、講演やシンポジウムにつながる報告であった。このドキュメンタリー映画は、労働者階級が質素な生活を営む 1960 年代初頭のモントリオール市サン・アンリ地区の 24 時間を切り取ったものである。本報告では、サン・アンリ地区

の住民のありのままの姿をとらえようとしたこの作品が、技術的な面や社会への眼差しという点で、当時流行だった「ダイレクトシネマ」のスタイルで撮影されていることが指摘された。しかし、知的要素を盛り込んだり、住民を近接撮影したりするなどして、ダイレクトシネマを超越しようとする意図が観察できる点において、他に類を見ないドキュメンタリー映画であることが主張された。映像を交えながらの報告は、全くの門外漢である筆者にとっても本作品のオリジナリティを感じる事ができるものであった。

それぞれの報告に対しては、参加者からも複数の質問やコメントがなされ、短時間ながらも充実した質疑応答であった。何よりも、司会者にとっては専門外のことも含めて多くのことを学ぶことができたセッションであった。改めて 3 名の報告者の方々に心より御礼申し上げる。



講演 1

紹介：杉原 賢彦 (目白大学)

2021 年度大会の目玉のひとつでもあったアニメーション作家・山村浩二さんによる講演は、「カナダ国立映画庁(NFB/ONF)との共同制作」と題され、ご自身が経験されてきた NFB/ONF との共同製作について、そのあらましとともに、カナダ・アニメシ



山村浩二氏と紹介者の杉原賢彦会員

ョン、わけても NFB / ONF の制作によるアニメーションの豊かな世界について、ご自身への影響をもとにお話をいただいた。

講演の中心となったのは、アメリカのディズニー作品などとは一線を画してきた NFB / ONF によるアニメーションについてだが、それらの作品を生み出してきた個々のアニメーターたちについて、それぞれの魅力や見どころについて。これに加えて、2010 年にご自身も NFB / ONF との共同制作に乗り出された次第について。日本人としては初めての NFB / ONF との共同制作だったが、その成果は翌年、短編アニメーション『マイブリッジの糸』となって結実する。世界で初めて、疾走する馬の連続写真を撮ることに成功したエドワード・マイブリッジと現代に住む母子の物語が交錯する時間の不思議を描いた作品は、カナダ・ジェニー賞の最優秀短編アニメーションの候補になったほか、広島国際アニメーションフェスティバルで特別賞を受賞、現在、山村監督の代表作のひとつとなっている。

山村監督とカナダ・アニメーションとの

出合いは、高校生ときだった 1980 年代のはじめに遡る。その当時、日本製アニメーションの水準は世界の後塵を拝しており（日本製「アニメ」が注目されるようになるのは、1980 年代後半のこと）、また世界のアニメーションの動向を知る術も限られていた。そうしたなかで目を見開かされる思いをしたのが、NFB / ONF の制作による作品群だったという。

やがて、本格的にアニメーション制作を始められ、オタワの国際アニメーション・フェスティバルに毎年のように作品を出品されていくようになり、1990 年代には映画祭にも足を運ばれるようになってゆく。そうしたなかで、NFB / ONF との関係も始まっていったという。

こうした関係性構築の重要性についてもさらりと触れられたのち、NFB / ONF を代表する監督たち——アニメーション部門のトップにいたノーマン・マクラレン以下、フランス語圏カナダ（つまりはケベック人）を代表するルネ・ジョドワン、ジャック・ドルーアン、さらにインド出身のイシュ・パテルなどなど、多彩なアニメーターを擁する——の作品について、それぞれの手法やその特徴、またそれらが山村監督作品におよぼした影響などについて、具体的に映像を見せながら講演は進んだ。

まず、ジャック・ドルーアンが駆使するピン・スクリーンの手法について話されたのだが、これは山村監督にとっては高校生時に見て衝撃を受けられた思い出の作品で

もあった。ロシア出身のアニメーター、アレクサンドル・アレクセイエフによって発明されたピン・スクリーンのデモンストレーションをドルーアン監督自身より受けた際の模様のことなど語られたのち、NFB / ONF のアニメーション部門を長らく率いたマクラレン作品についても、スクラッチ・アニメーションという、フィルムに直接、傷をつけて表現する手法について、細かにその行程を紹介。さらにマクラレンから直接、教えを受けたルネ・ジョドワンの幾何学的アニメーションについては、純粹アニメーションという側面から触れられ、最後に、インドから NFB / ONF にあこがれてやって来たイシュ・パテルによるビーズを使ったアニメーションにも話がおよぶ。

一般的に慣れ親しまれている物語をもったアニメーションとは違った、映像と音だけでなにかを表現しようとする純粹アニメーションは、その技法も重要な要素となる。それぞれのアニメーターと技法とは切っても切れない関係にあるのだが、そうした次第についても、山村監督は示されていった。

そして後半部は、ご自身の NFB / ONF 共同制作作品『マイブリッジの糸』について。その制作過程やとくに音入れ（音楽入れ）の状況など、実際の写真を交えながら語られるなかで明らかになっていったのは、細やかな NFB / ONF の制作の在り方だ。ミキシングの際に使われたのは、試写室にもなるスタジオであり、劇場内と同じ環境で音を整えてゆく。わずか十数分の作品に対し

ても精魂を傾ける NFB / ONF の制作体制は、日本では考えられないものかもしれない。

最後に、NFB / ONF のアニメーターではないが、ケベックを代表するアニメーターとしてフレデリック・バックについても、バックの実際の制作風景や秘蔵写真なども交えて紹介いただいたが、われわれにとってもっともなじみ深いアニメーション作家についてのお話は、締め括りとしてふさわしいものだったように思う。

1 時間という時間があったという間に過ぎていった。最後の質疑応答でも、アニメーションに付される音楽の問題についてなど、なかなかうかがい知ることができない部分についてもていねいに答えてくださり、充実した講演となったと感じている。

講演 2

紹介：真田 桂子（阪南大学）

今大会における午後の第 2 講演のセッションは、ケベックの映画評論家であるクロード・ブルアン（Claude R Blouin）氏によるビデオ講演であった。ブルアン氏は 1970 年代に日本の上智大学に留学した経験もあり、日本映画を専門とする映画評論家で、小説やエッセイなど多数の作品を発表している作家でもある。ブルアン氏と筆者は 30 年来の友人でもあり、この機会に日本のケベック研究者にブルアン氏とその仕事を紹介することができたのは、私にとって大きな喜びであった。

「日本映画を通したケベック＝日本の往



（左上から時計回りに）クロード・ブルアン氏、杉原賢彦会員、紹介者の真田桂子会員

来、あるいはフランス語圏ケベック人たちがいかにして日本映画を発見したか、またそれはどんな映画だったのか？ *Aller-retour du Québec au Japon via le cinéma japonais ou comment les Québécois francophones ont-ils découvert le cinéma japonais, et lequel?*」と題された講演は、様々な意味において異例の講演となった。ブルアン氏は今年 77 歳で、ケベックと日本との大きな時差を鑑みて、10 月に開催されたオンライン大会に直に参加頂くのではなく、ZOOM によるご講演を事前に録画する運びとなった。映画批評が専門で今大会のコーディネーターを務めた杉原会員と筆者がまずブルアン氏とオンラインで会合し、講演内容について綿密な打合せを行った。ブルアン氏は慣れないオンライン講演であるにもかかわらず、こちらの申し出を快く受け入れ意欲的に準備して下さった。

会員への周知を行い、9 月 15 日の日本時間の 22 時、ケベック時間午前 9 時に設定し、ブルアン氏の ZOOM によるオンライン講演会を開催し録画を行った。ケベック学

会からは平日の夜分の時間帯であったにもかかわらず、司会を務めた筆者と杉原会員のほかに、小倉顧問、廣松会員、西川会員、片山会員、コルベイク会員、また立教大に留学後モントリオールに帰った直後であったエチエンヌ・ローウ＝ジョバン会員が現地から参加してくれた。

ブルアン氏は今回の講演を自ら談話会 (Causerie) と呼び、あくまで一人のケベコワの体験談として肩肘はらずに聞いてほしいとの意向を示していた。司会者と杉原会員によるブルアン氏の紹介ののち、ブルアン氏の講演が始まった。人なつっこい笑顔がはじけ時折、ユーモラスな日本語も交えてのスタートであったが、話が佳境に入るにつれ講演は熱気を帯び、聞き手もぐいぐいと引き込まれていった。ケベックで日本映画が知られるようになったのは、日本映画の黄金期を築いた小津安二郎、溝口健二、黒澤明などの作品により日本映画が世界に知られるようになった 1950 年代であった。ケベックでは映画は娯楽として享受される一方で、シネクラブに出入りする若者やインテリ層を中心に、異なった世界を発見し議論するための教養として熱心に鑑賞された。日本映画は後者に属し、ハリウッドで制作された映画が大劇場で公開されていたのに対して、日本映画はミニシアターや大学の教室などを借りて細々と上映されていたが熱心な映画ファンを引きつけ徐々に浸透していったという。Séquences や Objectifs といった映画批評の雑誌の役割も

大きく、特に学生やインテリ層に支持されていた後者はしばしば日本映画を特集しその芸術性を高く評価した。ブルアン氏の講演において特に印象的であったのは、氏の主要著作である『日本映画と人間の条件』にタイトルとして引用もされている、小林正樹監督の映画「人間の条件」(1959～1961) がケベックの人々に与えた影響^{インパクト}である。講演の後の氏と杉原会員との対談でも取り上げられたが、3 年にわたり 6 部からなる作品として制作されたこの映画は、総上映時間が 9 時間以上にもなる超大作である。当時の日本でも上映が容易ではなかったこの作品が、なぜ、どのようにケベックで受容されたのか。ブルアン氏は、戦争の不条理のなかで、軍の横暴に抗いながら人間らしさを失わず生きようとする主人公梶の姿が、国家のアイデンティティや社会的正義と個としての人間の相克を象徴するものとして、当時「静かな革命」が進行しカトリック教会の呪縛からの解放と自立を模索していた若者を中心にケベコワの心に強く訴えかけるものがあったのだと力説した。この映画は、モントリオールの小さな劇場で深夜から朝方にかけて夜通しで、10 分ごとに要約がつけられて上映されたという。ホールは一杯になった若いファンの熱気にあふれ、最後まで一人も席を離れるものはおらず大成功であったという。その情景を想像すると感動的でしたらあった。またケベックと日本の社会は大きく違っているが、英語圏の大海に囲まれた島のようなケベックと日本

とはどこか島国的なメンタリティーで結びついており、例えば新藤兼人監督の「裸の島」など、様々な日本の映画がシンパシーをもって受け入れられたという指摘は実に興味深かった。

一方、ブルアン氏は、ケベックにおける数少ない日本映画の専門家としてモントリオール国際映画祭に協力してきたが、この映画祭で日本映画が数多く紹介されたのは、川喜多かしこ氏をはじめ熱心な協力者の尽力によるもので、そこで紹介された日本の映画はケベックの映画に大きな影響を与えたという。その他いくつもの貴重なエピソードや経験談が語られ、日本映画は紛れもなく、ケベックの人々にとって日本の文化や人々を知るための貴重な窓口の役割を果たしたことが分かった。ブルアン氏はあふれるように雄弁で、1 時間ほどを予定していた講演は時間を大幅に超過して盛り上がった。杉原会員のインタビューに続き、参加した AJEQ 会員との質疑応答に移るころには、日本は真夜中であった。参加者は皆、氏の熱気を帯びた話に引き込まれ、ZOOM の画面越しの時差も乗り越えた一体感のなかで、心地よい高揚感に包まれて講演録画は終了した。

その後、杉原会員が多大な労力をかけて録画を編集して下さり、AJEQ 全国大会では見事に予定時間内にぴったりと収まっていた。今回の録画講演が成功したのは、ひとえに杉原会員の献身的な努力の賜物であり心から感謝申し上げたい。会員からは、ケ

ベコワらしい親しみやすいブルアン氏の人柄がにじみ出た熱意にあふれた講演だったと好評だった。また大会当日、録画講演の開催時間はケベックでは真夜中であったにもかかわらず、ブルアン氏が眠たそうな目をこすりながら参加して下さったのは嬉しいサプライズであった。ブルアン氏の講演は、日本映画がケベックでどのように受けとめられたかを知るとともに、ケベックの人々の心をも動かした日本文化の神髄に触れることができた濃密な時間となった。

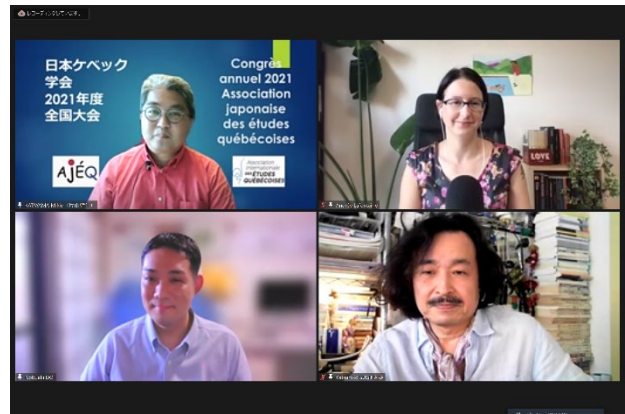
シンポジウム「ケベックの映画とアニメーション：映像文化とその表象をめぐってーケベックと日本」

司会：片山 幹生（早稲田大学）

シンポジウムで最初に登壇したアンドレ・ラフォンテーヌ会員（筑波大学）は、ケベックの映画およびテレビドラマで登場人物が話す日常的・俗語的なフランス語のヴァリエーションに注目し、映像作品における非標準的なフランス語の使用に対する批評家やメディアの反応を分析した。ケベックでは大きく四種類の社会的方言が存在する。国際的で標準的なフランス語、1950 年代から 60 年代にかけてとりわけ使用されたケベック独自の民衆的フランス語であるジュアル *le joual*、70 年代以降に広がり、定着したケベック・フランス語 *le français québécois*、そしてこの数年のあいだにモンレアルの都市住民のあいだで定着し、注目されるようになった新しいジュアルである

モンレアレ方言 *le parler montréalais* である。ケベック独自の民衆的口語であるジュアルは、公共的な場にはふさわしくない不純で崩れたフランス語とみなされ批判される一方で、ケベックのアイデンティティの拠り所として、そして脱植民地化の象徴としてメディアや映画、演劇などで使用されてきた。ただし映像作品における非標準的なケベック独自の口語フランス語の使用に対する批評家やメディアの反応はアンビバレントである。近年ではグザヴィエ・ドランの映画（とりわけ『胸騒ぎの恋人』(2010)と『Mommy マミー』(2014))でのジュアルの使用の是非が激しい論争を引き起こした。ここ数年は新しい都市方言であるモンレアレが、*Chien de gard* (ソフィー・デュピュイ、2018) (テレ・ケベック、2018～)、*Je voudrais qu'on m'efface* (Tou.TV、2021)などのテレビドラマで使われるようになった。これらのドラマではかなり過激な俗語としてのモンレアレが使用されているが、現在のケベックの都市生活のリアリティを反映するものとして受け入れられ、批判を免れている。映像作品における社会方言の使用への態度の変化は、標準的フランス語と彼らの日常的な言語に対するケベック人の意識の変化を反映するものになっている。

シンポジウムの二人目の登壇者は、アニメーション研究家で映画作品の配給を行っている土居伸彰氏だった。土居氏の発表「日本にとっての「アニメ」 モントリオールにとっての「アニメーション映画」—アニメ



(左上から時計回りに) 司会の片山幹生会員、アンドレ・ラフォンテーヌ会員、杉原賢彦会員、土居伸彰氏

ーションのスタンダードをめぐって」は、ケベックのアニメーション映画の立ち位置の独自性を解説するものだった。現在の世界的趨勢では、ほとんどの長編アニメーション作品は 3DCG で制作された子供向けのものになっているが、カナダ、特にケベックで制作されるアニメーションは必ずしもそうではない。昨年日本でも映画館で公開されたフェリックス・デュフル＝ラペリエールの『新しい街 ヴィル・ヌーヴ』は、レイモンド・カーバーの短編小説「シェフの家」を 1995 年のケベック州独立運動にからめ、離別した夫婦の過去と現在、そして未来の物語を描いた文学性の高いアニメーション映画だった。『新しい街 ヴィル・ヌーヴ』のような大人向けの 2D ドローイングによるアニメーション映画がケベックで生まれたのには、歴史的に、短編アニメーションの分野でアニメーションの歴史に残る貢献をしてきたカナダ国立映画製作庁の存在が大きい。カナダ国立映画制作庁の初代長官は世界的に知られた実験的アニメー

ション作家であるノーマン・マクラレンであり、彼の影響のもと、カナダでは個人作家による芸術的な短編アニメーション制作の伝統が継承されていた。またカナダの芸術文化への助成金の充実が、非商業的なアニメーション作品の継続的創造に寄与している。フェリックス・デュフル＝ラペリエールの『新しい街 ヴィル・ヌーヴ』は、このカナダ・ケベックのアニメーション映画制作の伝統の延長線上に現れた作品であり、商業的で子供向けの 3DCG アニメが主流の世界のアニメーションの潮流のなかで、ケベックでは今後もオルタナティブで挑戦的なアニメーション映画が発表される独自性が保たれるだろう。

三人目の登壇者、杉原賢彦氏(目白大学)の発表「ケベックと日本、映画的邂逅と表象」では、日本とケベックの映画交流によってどのような相互的影響があったのかについての考察だった。第二次世界大戦後の 1950 年代は、小津安二郎、溝口健二、黒澤明などの作品が世界的に評価され、日本映画が圧倒的な存在感を示した時代だった。その後、1967 年のモントリオール万博でアニメーション映画をきっかけに日本－ケベックのあいだで映画人の人的交流が始まる。1977 年にモントリオール世界映画祭が始まり、2018 年まで続く。この映画祭のなかで数多くの日本映画が高い評価を獲得した。こうした日本－ケベックの映画交流のなかで登場した映画人としてクロード・ガニオンがいる。大阪万博(1970 年)のお

りに来日し、日本人女性と結婚したガニオンは、1979 年に劇映画『keiko』を発表し、日本映画協会新人賞を受賞した。『keiko』の斬新な撮影スタイルと内容は、1980 年代以降の日本映画に大きなインパクトをもたらした。アマチュアの俳優とごく少数のスタッフによって制作された『keiko』は、1980 年代の日本映画のインディペンデント制作の動きの起点となった。杉原氏はとりわけ岩井俊二の代表作である『リリィ・シュシュのすべて』(2001 年)における『keiko』の影響の重要性について指摘した。

今年度の日本ケベック学会全国大会では、三人の発表者が登壇したシンポジウム以外でも、パク・ヒテ氏によるドキュメンタリー映画についての研究発表、山村浩二氏によるカナダ国立映画庁(NFB / ONF)との共同制作についての講演、そしてクロード・R・ブルアン氏によるケベックにおける日本映画の受容についての講演があり、ケベックの映画の充実ぶりをさまざまな観点から確認することができる貴重な機会となった。

●編集後記●

恒例の大会特集号をお送りします。充実の一方で、来年こそは集まりたいものです。なお、新理事会発足に伴って編集子も交代します。これまでのご愛読への感謝とともに、さらなるご支援をよろしくお願いします！(T)

AJEQ ニュースレター

年 3 回発行

発行人：丹羽 卓 編集人：大石太郎